

書 評

Chen, P. R., Morgan, J. and Pollack, M. E., ed.: *Intentions in COMMUNICATION*, 508 pp., The MIT Press (1990).

「スーパーマーケットで、ちらしを手に買物客が肉屋に近づいて『広告にある1ポンド88セントの牛肉はどこかしら』と尋ねる。肉屋は『どれだけお入り用ですか』と返答する。言語学、計算機科学、哲学、心理学のいずれをもってしても、この単純なやりとりは驚異である。なぜ、この肉屋の応答は完全に自然なものであり得るのか。本書はこう書き始められている。そして、肉屋が適切に応答するために中心的な役割を担うのが、買物客の意図と応答に含めるべき意図とに関して肉屋が行う推論であるという。

意図するとはどういうことか、どのような特徴を持つのか。有名な例をあげよう。戦略爆撃機の機長は、軍事工場を爆撃して、敵国に損害を与えようと考えた。同時に、彼は軍事工場のすぐ傍に小学校があり、工場を爆撃すれば多くの子供達が巻き添えになることを知っていた。熟慮のすえ、この機長が軍事工場の爆撃を意図したとき、彼は子供達を殺すことを意図したといえるだろうか。ここから、意図するということが論理的含意に関して閉じていないことがわかる。つまり、ある人が命題 P の成立を意図し、 P が Q を論理的に帰結すると知っていても、その人が Q の成立を意図しているとはいえないのである。意図に関するこのような一種哲学的な考察が自然言語インタフェースの設計に影響する。また、人工知能の分野で提案されたプランの概念で、間接発話の意味を説明しようという取組みが言語学の分野でなされる。問題は言語や談話だけに留まらない。意図を持つことは合理的主体の特徴の一つであるし、意図の伝達や認識のためのコミュニケーションは主体が集団として行動する基礎となる。この点で、これらの理論化はエージェント指向プログラムや分散人工知能などと密接に関連することになる。

このような背景で1987年に学際的ワークショップ「コミュニケーションと談話における意図とプラン」が開催された(これについては相沢、土屋 両氏による概要報告がある[1987 情処学 NL 研資 61-6])。そこに寄せられた13件の論文とそれらに対して用意された8件のコメントの修正版を中心に、関連の深い論文1件

と、歴史的背景を説明し全体を概観する序章を追加した、全23章からなるのが本書である。確かに学際的な試みであり、しかもその分野で極めて著名な研究者らが寄稿している。哲学的観点からの論文が5件、計算機科学・人工知能の観点からが8件(うち1件は言語学者との共著)、心理学が1件という構成である。

内容的には大きく三つの部分に分けられる。最初に意図がどのような性質を持つかが問題となる。意図とはそもそも何か、意図とプランとはどのように関連するのか、それらはどのように認識されるのかについての議論が展開される。次に、対話やコミュニケーションが注目される。ここでは、発話が行われ、特に対話参加者の心的状態に影響を与えるような行為、として捉えられ、形式的な意味づけが行われるとともに、文の意味が真理条件であるという考え方との融合が図られる。また、対話を理解し理論づけようというさまざまな取組みにおいて、合理的行為や対話参加者の心的状態に関する原則が重要であると指摘される。最後に、集団的行為がクローズアップされる。ある集団が協調して何かを行うとき、それを支える意図はどこにあるのか、それは集団に属する個人の意図に還元され得るのか、どのように確立されるかが問題となる。さらに対話自体を集団的行為と捉え、そこで話し手と聞き手とがどのように協調しているかが議論される。

いずれも読みごたえのある論文ばかりである。談話の分野に従事する研究者にとっては必読書といえるし、そこに留まることなく多くの研究分野に関連する。第1章から通読にこだわる必要はなく、基本的に任意の章から読み始めることができる。興味深い章に出合ったときには、その前後の章に当たれば、同じもしくは関連する主題に関するほかの分野の、異なった方法論によるアプローチを見い出すこともできる。もちろん、そこにはまだ、統一的な見解は見い出せないし、それどころか、記法の統一すら存在していない。しかし、そこに至ろうとする多くの研究者達の姿勢と努力を見い出すことができるはずである。

〔加藤 恒昭 (NTT 情報通信網研究所)〕